

母校の発展に貢献する 「強固な同窓会」をつくる

関西学院同窓会の使命は「母校の発展に貢献することです。この4月に就任された亀岡剛新会長は「同窓生になることに誇りを持ち続けられる母校にしたい」という強いメッセージを発信されています。そして新たに志を一にした11名の副会長とともにこの「母校への貢献」の実現に向けて歩み始めました。また、この副会長の中から竹本清三副会長に会長代理として事務局体制の更なる強化を託されました。今回はそのお二人に同窓会の「母校への貢献」について語っていただきました。

人に恵まれ充実した

関西学院での学生時代

どのような経緯で

関西学院に進学されたのですか。

亀岡 私と関西学院との出会いは小学生の頃になります。私のおじが関学のレスリング部に所属する学生で、夏休みに練習に連れていってもらった際にキャンパスの素晴らしさを知り「すごいとこやな」と子ども心に感動したことを覚えています。そのとき通つて

いた塾の先生からも「亀岡くんは関学に合うと思うよ」と勧められたので、受験してみようと考えました。中学3年生の時は、陸上競技部の友人と生徒会の役員をやりました。彼が会長、私は副会長で生徒会活動も頑張りました。高校での一番の思い出は学友会（生徒会）を復活させたことです。大学紛争の影響でなくなってしまったので、周りから「生徒会は必要だろう」「君がやるべきだろう」と言われて、中学部からずっと一緒に遠距離通学

していた友人とともに生徒会を再開させました。

竹本 当時からバイタリテイにあふれていたのですか。私もですが大学は経済学部へ進んだのですか。

亀岡 ええ。小寺武四郎先生のゼミに入りました。竹本さんもですね。

竹本 年代は違いますが、私も小寺先生にお世話になりました。

亀岡 大学では中学部のキャンプリーダーをしていました。キャンプに行く青島は無人島で、万が一でも子ども

にけがをさせたり、命の危険にさらしたりしてはいけません。中学生たちを守りながら関学生としての基礎を身に付けるための指導を行うリーダーとしての経験は、自分も成長するきっかけとなりました。

竹本会長代理も中学部から

関西学院ですね。

竹本 そうです。私の父が関西学院の高等商業学校で学んでおりまして、当時非常にお世話になったのが矢内正一先生でした。ちょうど私が受験する頃の中学部長で、小学6年生のときに父に連れられて矢内先生のご自宅に伺い、お話を聞かせていただきました。包み込まれるような優しい口調なのですが、威厳のある風貌で矢内先生を目を見ると背筋が伸びました。そこで頑

張って受験しようと思いましたが。

亀岡 高校、大学ではどのように過ごしたのですか。

竹本 何を思ったのか外部受験しようと思つて、部活には入らず塾に通つて勉強を頑張ろうとしたのです。普通に考えれば実家が商売をしていて私は長男なので、家を継ぐことになるのですが、父には「どんな道に進んでもいい」と言われました。しかし、受験するよ

うな人があまりいない学校ですから、途中でしんどくなつてしまいました。父も「最終的に家業を継ぐのだから無理なくいい」と言ってくれたので、高2の途中で受験勉強はやめたのですが、英語の塾には通い続けました。大学では大ブームになっていたボウリングの同好会に入り、大学の帰りに西宮北口にあったボウリング場に同好会

社会への貢献を目指し

日本を支える企業に就職

亀岡会長は大学卒業後の進路はどのように決められましたか。

亀岡 私はシェル石油に入社しましたが、そのきっかけは面接の時「何のためにこの会社が存続するのか」ということについて学生の私にもしっかりと示してくれたことでした。エネルギー自給率が低い日本において、重要なエネルギーである石油の供給を担う責任



竹本 清三

1974年経済学部卒。同4月よりタカラベルモント株式会社入社。約3年半勤めた後、洋菓子店に入り製造工場に勤務。半年後、家業の和菓子店株式会社高山堂に入社。2021年関西学院同窓会副会長、2024年関西学院同窓会会長代理、学校法人関西学院評議員。



亀岡 剛

1979年経済学部卒。同4月よりシェル石油株式会社（現昭和シェル石油）入社。近畿支店長、副社長などを経て、2015年代表取締役社長、グループCEOに。2021年関西学院同窓会副会長、2024年関西学院同窓会会長、学校法人関西学院常任理事。

が我々にはある、という話を聞きまし
た。私が関学生として意識していたこ
とは「社会に貢献するために関学で学
んでいる」ということでした。どのよ
うに社会で貢献していくのか、という
自分の考えと当時のシェル石油の先輩
から聞いた思いが一致していたことが
入社を決めた一番の理由です。

昭和シェル石油時代の思い出は数知
れませんが、強く印象に残っているの
は私が常務だったときに経験した東日
本大震災です。私は特に現場を大切に
し、全国の特約店さんを回り様々な人
間関係をつくっていたのですが、震災
の直後、気仙沼の特約店さんから「助
けてくれ」と電話が入りました。話を
伺うと、海岸沿いの給油所が壊滅状態
で全国から自衛隊や救急車、消防車が
来るが燃料がない。高台の給油所が1
軒だけ残っているのなんとか助けてく
れないかという内容でした。多くのタ
ンクローリーが津波で流されてしまっ

た状況で、驚くことにその特約店の社
員の方は真つ先に1台のタンクロー
リーを高台へ避難させておられました。
その1台だけ残ったタンクローリーを
使つて気仙沼と秋田を毎日往復し、災
害現場へエネルギー供給を行うことが
出来ました。社会的使命であるエネル
ギーの安定供給をずっと念頭において
きましたが、それは周りの方々の努力
や支えがあるからこそ実現できている
のだと強く実感した出来事でした。

竹本会長代理はすぐには家業を
継がなかったのですよ。

竹本 継ぐ前に一度就職しよう
と思つて就職活動を始めました。しかし
会社説明会などに行つても「お家が商
売をされていてご長男なら、話を聞い
ていただいても無駄ですね」と言われ
るのです。そのような状況でしたが、
私の事情を理解した上でタカラベルモ
ントに採用していただきました。配属

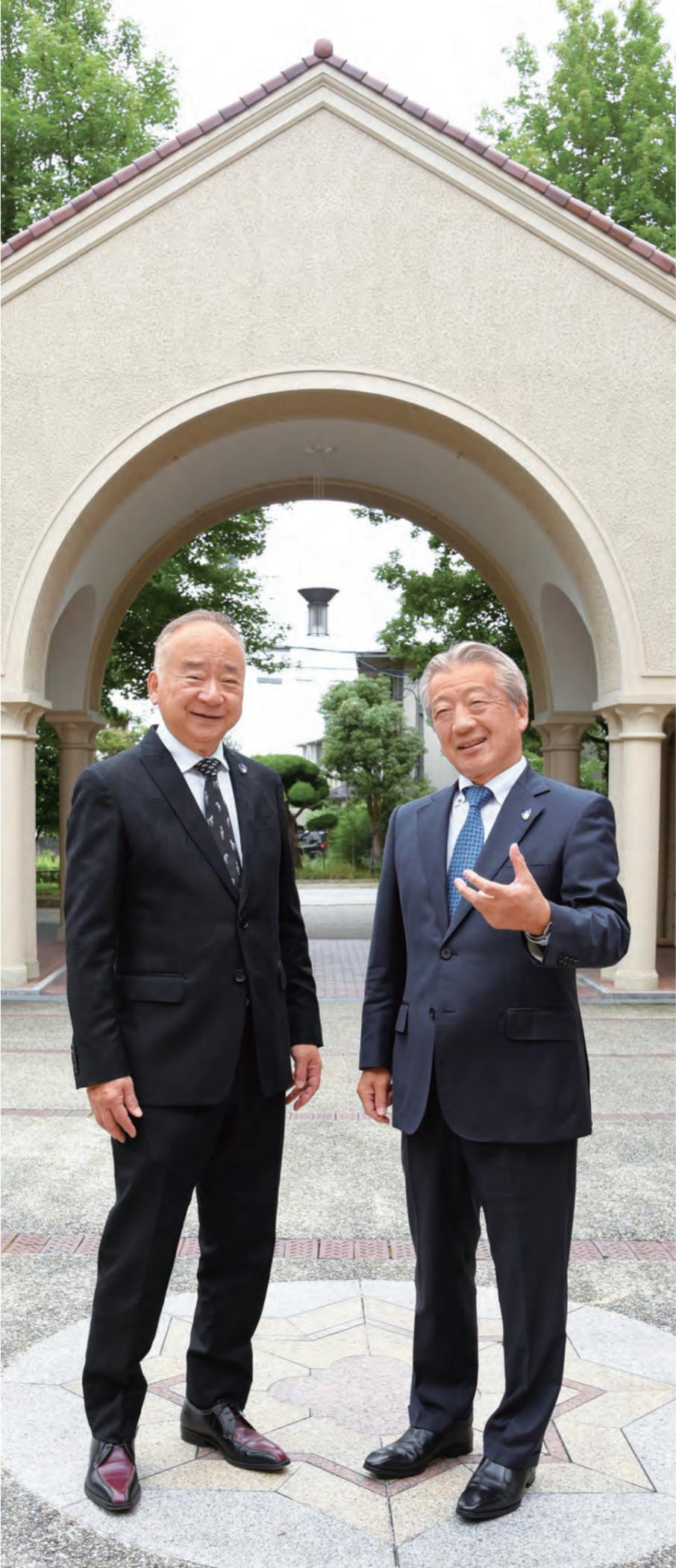
されたのは経理課で、当時の総務部長
から「経営者は数字を理解していい
といけない。だから君は経理で数字も
勉強しなさい」と言われました。タカ
ラベルモント時代には労働組合の役も
させていただきました。春闘での団体
交渉にも同席させてもらいました。そ
れは凄まじい言葉の応酬でしたが、経
営者の受け答えを直接見て聞いて、勉
強させていただきました。約3年半在
籍し、その後関学の方が経営する洋
菓子店の工場で修業。カスタラを焼く
など半年間忙しい現場の労働環境に身
を置きました。

少子化の危機感から

母校の発展への尽力を決意

同窓会副会長に就任されたきつかけと、
会長・会長代理になられた際の
想いなどをお聞かせください。

亀岡 会社の役員を退任して少し



てきたように、今度は同窓会を通じ
て母校に貢献していかなければならな
いと考えたのです。

竹本 今後の同窓会をどうしていくべ
きか、何のための同窓会なのか、根本
的に見つめ直さなければならぬとい
う話を二人で突き詰めました。もつ
と同窓のためになる同窓会でないと
けない。ひいてはそれが関西学院の発
展につながるものとしなければならな
い。基本となる思いが亀岡会長と一
致したわけです。亀岡会長と同じゼ
ミですが、私の方が5年先輩なんで
すね。会長職を引き受けられる人材
は限られていまして、並々ならぬ使
命と責任を背負うことになりました。

ただ会長は東京にお住まいで、私は
西宮在住で学校に近いところにいる
ので、地の利を生かして二人三脚で
やつていけばうまく運営できるのでは
と考え、亀岡会長をお手伝いしよう
と会長代理になりました。それに息

子も関西学院で学ぶことができ、そ
の間、私は中学部のPTAや高等部
育友会、全学の後援会会長をさせて
いただき、その後高等部の同窓会会
長や西宮支部の支部長も務めてきま
した。このように私と亀岡会長は違
うプロセスで人生を歩んできました
が、だからこそカバールし合える面があ
ると思います。

亀岡 竹本会長代理はずつと経営者
として組織や社員、関係企業、そして
お客様を守ることに取り組んでこられ
ました。そのすごさや強みは私にはな
いものです。

あらゆる世代を巻き込み 大きな力としてまとめ上げる

同窓会をどのような組織に
したいとお考えでしょうか。

亀岡 同窓会の目的は「Mastery
for Service」の実践「会員相互の研

鑽と親睦」「母校の発展への寄与」の
3つです。「会員の親睦」は各地で活
発に行われていますが、他の目的に対
する活動はまだまだこれからです。こ
の課題をクリアしていくために、様々
な活動を全国各地の支部で行ってい
だき、同窓会本部としてはそれらを全
国的に広めていくということに注力し
て参りたいと考えています。各支部で
行われたイベントや相互研鑽の取り組
み・ボランティア活動などについては、
同窓会事務局からマンスリーレポート
として全国の支部へ送っていきます。
それを見て各支部において「じゃあう
ちの支部でもこんなことをしようか」
と考えるきっかけにしたいだけじゃ
なく、同窓会活動に参
加されている方は比較的年齢層が高
く、さらに世代を超えた交流も課題
だと感じています。卒業したばかりの
若者から高齢層までいろんな年代の
方々が参加する同窓会にしていきたい

です。若い人たちにもしつかり参加し
てもらい、相互に研鑽し、そして同窓
の力として「Mastery for Service」
を実践し、学院に貢献ができるとい
うことを示していきたいです。27万人
いる同窓を大きな力とし、同窓会活
動に積極的に参加していただき稼働
していく仕組みづくりをはじめまし
た。例えば業界における同窓の集ま
りはビジネスのネットワークづくりに
役立つということでも若い同窓生もたく
さん参加しています。同窓会をそのよ
うな自分自身の成長にも役立つ場だ
と認識していただき、関西学院の卒
業生で良かったと思つてもらえるよう
にしていきたいですね。また、同窓会
事務局には学院に長く勤めてこられ
た宮脇さんに専務理事として加わつて
いただきました。今後、さらに同窓
会と学院の連携を強固なものにし、
母校に対する貢献を推し進めていき
たいと思います。

ゆつくりとした生活を送ろうと思つて
いたときに「同窓会の副会長をやら
ないか」と声をかけていただきました。
少しでも母校に恩返しできればとい
う思いで副会長の就任をお受けしま
した。次の年には関西学院の理事に
就任しました。その中で母校を取り
巻く大変厳しい環境を実感するよう
になりました。日経BP社が行つてい
る大学のブランド調査で、関西学院
大学は関西の私立大学中5位でした。
また、現在18歳人口はどんどん減つ
ていて、今年生まれた子どもは約75
万人です。私の年代では約160万
人いました。今後は高校生の人数が
どんどん減っていくことが確実です。
さらに、公立大学の無償化の話もあ
ります。このままだと関西学院はど
うなるのかと強い危機感を感じまし
た。そこで竹本さんと二人で語り合い
「会長をやるう！」という決心をし
ました。これまで企業で社会に貢献し

“Mastery for Service” を活かし強固な 同窓会をつくるために

同窓生、そして学生に望むことは何でしょうか。

亀岡 同窓生には「あなたの力が必要です」ということをお伝えしたいですね。今後、様々な活動の機会を作っていきますので、ぜひ参加していただきたいです。同窓の先輩のみなさんは「Mastery for Service」の精神が身に染みついていて、社会の中で様々な形で個人で実践している方はたくさんおられます。それを同窓会全体に広げていき、「強固な同窓会」を作り上げていきたいです。大学生活は4年間ですが、同窓会会員は何十年にもわたりますが、同窓会がさらに強い組織になって



いけば、トータルバリューとして関西学院全体の価値も上がると思います。そのため同窓会の目的にあるように、卒業生にとって同窓会はみなさんが社会に出てからもさらに成長し、関西学院で学んだ“Mastery for Service”の精神を実践しつつ母校に貢献していく場だと認識していただきたいです。

竹本 こうした亀岡会長の想いを伝えるために、私はできるだけ会長の都合がつかない機会に参加してこの想いをお伝えしています。我々が描く同窓会の方向性を発信していくことが大切だと思います。また、同窓会事務局のスタッフのポテンシャルをもっと発揮できるように、仕事の内容を整理し直し、事務局スタッフとも定期的に打合せしています。事務局がスムーズに仕事ができたら潤滑油となり、支部の活動も盛り上がるという好循環が生まれるはずで、亀岡会長もおっしゃったとおり、大学4年間つながりが終わるなんてもつたないことをしてほしいですね。参加することによって新たな出会いや勉強の機会が生まれますし、人生が豊かになっていくと思います。同窓のみなさんには同窓会を上手に活用していただきたいです。そして我々は、一人でも多く参加していただけるように努力をしていかなければなりません。

学生のみなさんには、関西学院の恵まれた環境で、一人でもいいので気心の



知れた友人を見つけてほしいと思います。私自身、支え合える友人に恵まれました。人は財産であり、同じ環境で学んだ友人は貴重な存在です。

亀岡 昭和シェル石油でCEOを務めました。昭和にお会いした多くの経営者のみなさんは本当にすごい方々ばかりでした。しかし、唯一私がその方々に勝っていると思つたのは、「私は活かされてる」という気持ちを持ち続けていることでした。これはまさに関西学院の「キリスト教主義による全人教育」のおかげであり、この学びにより「自分は周りの方々の努力によって活かされている」という気持ちを常に持ったトップマネジメントであり続けることができました。学生のみなさんへのアドバイスは、関西学院の「建学の精神」をしつかりと学んで社会に出

てくださいということです。同窓会は学生のみなさんの卒業後の受け皿として、自分自身もさらに成長できるような相互研鑽や様々なネットワーク作りのサポートを行ってまいります。同窓のみなさんに“Mastery for Service”の精神を社会で実践していく場を提供していくことで母校へ貢献していきたいと思えます。

対談を終えて

これからの同窓会について、亀岡会長・竹本会長代理におおいに話していただきました。お二人が両輪となって、力強く同窓会活動を進めていきたいという考えが伝わってくる対談でした。「“Mastery for Service”の実践」「会員の相互研鑽と親睦」「母校の発展への寄与」という同窓会の3つの大きな目的に合致した活動を活発に行っていく、卒業生が入りたい、研鑽する場としての同窓会、同窓生にとって心強い組織を作っていただきたいという会長の強い思いを感じました。お二人のお話を伺い、特に卒業間もない同窓生が、社会での道しるべになるような、入ってきやすい同窓会となればよいなと思えました。

編集委員長 梨木 祐亮